

自著と  
その周辺

新体系看護学全書 別巻 治療法概説

メヂカルフレンド社  
348頁  
2007年11月刊行  
3100円+税

分担執筆いたしました「新体系看護学全書 別巻 治療法概説」を紹介いたします。

新体系看護学全書は58の分冊からなり、看護学の教科書として看護学に関わる全ての分野を網羅し、物理学などの基礎分野、解剖生理学などの専門基礎分野、看護学の専門分野（専門分野Ⅰ、Ⅱ）、在宅看護論などの統合分野と別巻から構成されています。

別巻には、臨床外科看護学Ⅰ、臨床外科看護学Ⅱ、放射線診断と看護、臨床検査、生と死の看護論、リハビリテーション看護論、病態と診療の基礎、治療法概説、看護管理・看護研究・看護制度、機能障害から見た成人看護学①、機能障害から見た成人看護学②、機能障害から見た成人看護学③、機能障害から見た成人看護学④、機能障害から見た成人看護学⑤、があり、治療法概説では様々な疾患に適用される治療法を、35名の専門家が第1章薬物療法、第2章食事療法、第3章運動療法、第4章リハビリテーション療法、第5章放射線療法、第6章内視鏡的治療、第7章手術療法を分担執筆しています。

私は、この第7章手術療法の中で臓器移植を担当し、臓器移植の歴史（世界とわが国）、臓器移植における適合性（組織適合性抗原、移植とHLA、血液型抗原と副組織適合抗原）、拒絶反応（機序、種類、診断法、免疫抑制薬、免疫抑制薬と作用機序、免疫抑制療法の実際、免疫抑制療法の副作用）、臓器保存法（虚血・再灌流障害、保存法の理論・分類、保存液）、移植手術（脳死ドナーからの移植、生体移植）について、主に肝移植の観点から執筆しました。本著は、看護師養成課程での定期試験、看護師国家試験で求められる以上の内容を含んでいるかと考えますが、移植実施の施設が増加した（2015年末時点での移植実施施設累計で、生体肝移植施行は67施設、脳死肝移植施行は23施設）現在においては看護学生のみならず移植医療にたずさわる現役看護師の生涯教育においても役立つものと自負しています。

本著は2007年以降改訂が行われていませんが、より現状に合った内容を求めるのであれば、生体肝移植における倫理に関する記載、移植におけるレシピエントコーディネーターの役割、脳死下臓器提供の現状と問題点などについて加筆・追記が適切かと考えます。

ところで、わが国での臓器移植の歴史を語る際に、これまでの信州大学の業績を忘れることはできません。1988年にブラジルにて世界初の生体肝移植が実施され、本邦においては初めて1989年に島根医科大学にて胆道閉鎖症の患者さんに施行されました。その後、京都大学に引き続いて1990年に信州大学で胆道閉鎖症の患者さんへ本邦で3例目の生体肝移植が施行されています。以降、信州大学は1992年に世界初の急性肝不全に対する生体肝移植の実施・成功、1993年には世界初の成人間生体間生体肝移植、1998年には尾状葉付き左葉グラフトの使用を報告しています。このように信州大学は本邦ならびに世界において生体肝移植のパイオニアの役割を果たしてきました。2015年末までに本邦全体では計8,066例の生体肝移植が施行されており、信州大学の同時期の生体肝移植症例数は301例となっています。本邦の年ごとの生体肝移植実施数は、2005年の566例をピークに減少傾向にあり、2015年には391例でした。信州大学においても生体肝移植実施症例数は減少傾向にありますが、その良好な成績と丁寧な診療には特筆すべきものがあります。一方、脳死肝移植については、1997年の臓器移植法の施行後1999年に信州大学にて本邦第1例目の脳死肝移植が代謝性肝疾患の患者さんに対して施行されました。2015年末までに本邦での脳死肝移植施行例は318例であり、そのうち16例が信州大学での施行例です。

（信州大学医学部地域医療推進学教室 中澤 勇一）